

没落と大いなる正午

細川, 亮一
九州大学人文科学研究院 : 教授 : 倫理学

<https://doi.org/10.15017/1440955>

出版情報 : 哲学論文集. 40, pp.1-18, 2004-09-25. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

没落と大いなる正午

細川 亮一

「このようにツアラトウストラの没落は始まった」。

『ツアラトウストラ』序説1の終りで語られるこの言葉は、序説全体を閉じる言葉でもある。「ツアラトウストラが始まる」とは、「ツアラトウストラの没落が始まる」ことなのである。ツアラトウストラの没落が始まることによって『ツアラトウストラ』という時間の物語は始まる。そしてこの物語は彼の没落の終りを目指し、没落の終りによって終わるだろう。第三部「回復する者」2において彼の動物たちが没落の終りの場面を予め描いている。「没落する者が自分自身を祝福する時が今や来た。このように――ツアラトウストラの没落は終わる」。没落の開始と没落の終りが『ツアラトウストラ』全体を画定している。『ツアラトウストラ』を一つの全体として捉えるために、没落の意味を明らかにしなければならない。しかしそれは大いなる正午を問題とすることに結びつく。何故ならツアラトウストラの没落の終りは、ツアラトウストラが永遠回帰の教師として、大いなる正午において永遠回帰の教えを教えることによって実現するからである。

一 ツアラトウストラの没落は始まつた

「ツアラトウストラが始まる」＝「ツアラトウストラの没落が始まる」であるが、しかし没落とは何を意味するのか。「ツアラトウストラ」におけるツアラトウストラの最初の言葉は、太陽への語りかけである。「お前、大いなる天体よ。もしお前が照らす者たちを持たなかつたなら、お前の幸福は何であろうか。／……／私は贈与し分与したい、人間のなかの賢者たちがもう一度彼らの愚かさを喜び、貧しい者たちがもう一度彼らの豊かさを喜ぶまで。／そのために私は深みへ降りて行かねばならない。つまりお前が夕方、海のかなたに沈み、さらに暗き下界(Unterwelt)に光をもたらずとき、するように。お前、極めて豊かな天体よ。／私が降りて行こうと欲する人間たちが呼ぶように、私はお前のように没落しなければならぬ」

〔序説〕 1)。

ツアラトウストラの没落は、ツアラトウストラが「人間たちのもとへ降りて行く」ことを意味する。「私の下降、没落の時。何故ならもう一度私は人間たちのもとへ行くことを欲するからだ」(「新旧の板」1)。人間たちのもとへ降りて行くことが没落と呼ばれるのは、ツアラトウストラが降りて行こうと欲する人間たちがそのように呼ぶからである。このことを「喜ばしき知」の最初に置かれた詩の47「下降」が見事に歌っている。「彼は沈む、彼は今や落ちる」——お前たちはときおり嘲笑的に言う。／本当は、彼はお前たちのもとへ降りて来るのだ。／彼の豊かな幸福が彼に重荷となったのだ。／彼の豊かな光がお前たちの闇を求めるのだ。「沈む、落ちる」(没落する)と見えることは、実際は「降りて来る」(人間たちのもとへ降りて行く)ことである。それは豊かな幸福が贈与することを欲し、豊かな光によつて闇を照らすことである。つまりツアラトウストラが深み(人間たちのもと)へ降りて行くのは、「贈与し分与したい」からである。この「人間たちのもとに降りて行く」ことが「太陽が沈む(untergehen＝没落する)」ことに即して語られている。

太陽は夕方海のかなたに沈むが、それは海の彼方の暗き下界に光をもたらすこと、暗き下界（闇）に朝をもたらすことである。極めて豊かな天体としての太陽はその豊かさ故に、その光を与える闇を求める。豊かな光を与え照らすことのうちに太陽の幸福がある。「太陽が照らす者たちを持たなかったなら、太陽の幸福は何であろうか」。ツアラトゥストラの没落が太陽の没落（太陽が沈むこと）とされるのは、ツアラトゥストラの没落が暗き世界に光をもたらすこととして考えられているからである。没落は「沈む、落ちる」といった否定的なことではなく、暗き世界に新しい朝をもたらすという肯定的なことを意味している。ツアラトゥストラの没落は沈む太陽のように、新しい朝の太陽となることである。

第四部において、真夜中に「もう一度」という名の歌、永遠回帰を欲する歌で終わる長い一日が明ける。その翌日を舞台とする第四部最終章「徴」は次のように始まる。「しかしこの夜が明けた朝、ツアラトゥストラは彼の寢床から起き上がり、腰に帯をまき、彼の洞窟から外へ出てきた、燃えるように力強く、暗い山から来る朝の太陽のように」。そして「徴」は、つまり「ツアラトゥストラ」という物語は次のように終わっている。「これは私の朝だ、私の日が始まる。今や上つて来い、上つて来い、お前、大いなる正午よ」／このようにツアラトゥストラは語り、彼の洞窟を立ち去った、燃えるように力強く、暗い山から来る朝の太陽のように。「燃えるように力強く、暗い山から来る朝の太陽のように」という言葉を「徴」の最初と最後に配置することによって、そして「彼の洞窟から外へ出てきた」と「彼の洞窟を立ち去った」という対句によって、最終章「徴」は一つの円環を形作っている。

しかしさらに「徴」におけるツアラトゥストラの最初の言葉は、序説での上で引用した彼の最初の言葉に対応している。「お前、大いなる天体よ、とツアラトゥストラは以前に語ったように語った、お前、深い幸福な目よ、もしお前が照らす者たちを持たなかったなら、すべてのお前の幸福は何であろうか」（「徴」）。つまり「ツアラトゥストラ」はその終り（「徴」）において、その始まり（「序説」）を想起させ、一つの円環を形作っている。この円環性は「ツアラトゥストラ」の最後の言葉「暗い山から来る朝の太陽のように」のうちのにつきり読み取れる。「このようにツアラトゥストラの没落は始まった」

として「ツアラトゥストラ」の物語は始まった。それはツアラトゥストラが朝の太陽となるためであった。「ツアラトゥストラ」が「暗い山から来る朝の太陽のように」という言葉で閉じられていることは、この没落が終わることを示している。没落は朝の太陽となることであるから、最後の言葉はツアラトゥストラの没落のテロス（終り）を意味しているのである。「ツアラトゥストラ」は、その最後の言葉によつて序説の没落の意味（没落＝朝の太陽）を想起させ、それによつてその円環を閉じるのである。^①

「ツアラトゥストラ」における彼の最後の言葉は、「これは私の朝だ、私の日が始まる。今や上つて来い、上つて来い、お前、大いなる正午よ」であつた。「没落＝朝の太陽」は私の朝、私の日の始まりである。このツアラトゥストラの日において、大いなる正午を迎える。だから「今や上つて来い、上つて来い、お前、大いなる正午よ」と最後にツアラトゥストラは呼びかけるのである。しかし大いなる正午とは何か。

二 大いなる正午を祝う

「そしてさらにいつかお前たちは私の友となり、一つの希望の子供たちとなるべきである。そのとき私は、お前たちと共に大いなる正午を祝うために、三回目にお前たちのもとにいたいのだ。／そして大いなる正午とは、人間が動物と超人との間の彼の軌道の中央に立ち、夕方への彼の道を最高の希望として祝う時である。何故ならそれは新しい朝への道だからである。／そのとき没落する者自身は、向こう側へ渡つて行く者であるが故に、自分を祝福するだろう。そして彼の認識の太陽は彼にとつて正午に位置するだろう。／『すべての神々は死んだ。今や我々は、超人が生きていることを欲する』。——これがいつか大いなる正午において我々の最後の意志でありたい」。第一部「贈る徳」の最後においてツアラトゥストラは彼の三回目の下山についてこのように語っている。ツアラトゥストラが「暗い山から来る朝の太陽のように」下山する場面で「ツアラトゥ

ストラ」は終わっているが、この下山こそ大いなる正午を迎える三回目の下山である。

「すべての神々は死んだ。今や我々は、超人が生きていることを欲する」という表現は、第四部「高等な人間」2において、次のように表現されている。「神は死んだ(Gott starb)。今や我々は欲する——超人が生きていることを」。この単数形の神はキリスト教の神である。しかし「すべての神々が死んだ(Tot sind alle Götter)」における複数の神々は、キリスト教道徳を含めた最高の諸価値を意味するだろう。神々とは古き世を支配していた最高の諸価値である。こうした最高の諸価値(神々)が存在するかぎり、新しい価値を創造できない。「神々が存在するとすれば、一体創造すべき何があるだろうか」(第二部「至福の島」)。神々には国家という最高の価値も含まれるだろう。新しい偶像としての国家は「地上に私より大きなものはない。私は神の秩序づける指である」(第一部「新しい偶像」と語る。この新しい偶像(地上における最も大きいものとしての国家)地上の神||リヴァイアサン)に対して、ツアラトゥストラは超人を対置する。「国家が終わるところに……お前たちは見ないか、虹を、超人の橋を」(新しい偶像)。「すべての神々は死んだ。今や我々は、超人が生きていることを欲する」とは、従来の最高の諸価値から新しい価値の創造への転換、古き世から新しき世への転換を意味する。この歴史の転換は永遠回帰の教えを告知することによって可能となる。「回帰の教えは、歴史の転換点である」⁽²⁾。

「大いなる正午とは、人間が動物と超人との間の彼の軌道の中央に立ち、夕方への彼の道を最高の希望として祝う時である。何故ならそれは新しい朝への道だからである」。この言葉をいかに解釈すべきなのか。まず注意すべきなのは、大いなる正午の後に、夕方、新しい朝が語られていること、大いなる正午とその翌日という二日を想定していることである。大いなる正午においてツアラトゥストラは永遠回帰の教えを告知して、死ぬことになっている(三)。永遠回帰の思想の告知によって、ツアラトゥストラの没落は終わる。とすればツアラトゥストラ自身にとって大いなる正午の翌日は語りえないだろう。

ツアラトゥストラと共に大いなる正午を祝う者こそが、つまり「一つの希望の子供たち」が、「夕方への道を最高の希望として祝う」のである。永遠回帰の教えを教えることによってツアラトゥストラの没落は終わる。しかし子供たちにとって

は、「ツアラトウストラの没落が始まった」ように、ここから彼らの没落が始まるのである。つまり子供たちはツアラトウストラの歩んだ道を再び歩み、超人となる。没落する者自身は、「向こう側へ渡って行く者」、超人となる者である。子供たちにとって夕方への道が新しい朝への道であるとは、夕方の太陽の没落（夕日が沈むこと）が暗き下界に新しい朝をもたらすことである。「ツアラトウストラ」の最後でツアラトウストラが「朝の太陽のように」下山するが、そのように子供たちの新しい朝は、新しい大いなる正午、子供たちにとっての大いなる正午を迎えるだろう。「彼の認識の太陽は彼にとって正午に位置するだろう」とは、子供たちにとっての大いなる正午を意味している。この大いなる正午において子供たちは永遠回帰の教えを他の人々に教えることによって、永遠回帰の思想が人々の間に拡がるだろう。

大いなる正午が一度かぎりでないことを、永遠回帰の思想の襲来の断章と同じノートに属する遺稿ははっきり語っている。「そして人間の生存一般のあらゆる円環のうちに、最初に一人の者に、次に多くの者に、次にすべての者に、最も力ある思想、すべての物の永遠回帰の思想が浮かぶ時がつねに存在する。それはその都度人類にとって正午の時である」⁽³⁾。ツアラトウストラは永遠回帰の思想が最初に浮かぶ者、永遠回帰の教えを教える最初の者である。ツアラトウストラの動物たちは彼に言う。「お前は最初の者としてこの教えを教えねばならない」（「回復する者」⁽²⁾）。そしてツアラトウストラは永遠回帰の最初の教師として、「超人のための、人類の自己克服の模範」⁽⁴⁾である。この模範（*Forbild*）に従って、ツアラトウストラの子供たちは彼と同じ道を歩み、彼らの大いなる正午を迎え、超人となるだろう。

三 ツアラトウストラの没落は終わる

第三部「回復する者」においてツアラトウストラの動物である驚と蛇は、永遠回帰の教師としての彼の運命を語る。そして動物たちはツアラトウストラの最後の言葉を予言する。その言葉は「今や私は死に、消え去る」で始まる。そして永遠回

帰の教えを語り、最後に次のように言う。「私は私の言葉を語った。私は私の言葉によつて碎ける。そのように私の永遠の運命が欲する――告知者として私は滅びるのだ。／没落する者が自分自身を祝福する時が今や来た。このように――ツアラトゥストラの没落は終わる」(「回復する者」2)。動物たちの予言によれば、永遠回帰の教えを告知した後、ツアラトゥストラは死ぬことになっている。永遠回帰の告知とツアラトゥストラの死は、『ツアラトゥストラ』の構想において一貫している。遺稿によれば、大いなる正午を祝う祝祭においてツアラトゥストラは死ぬことになっている。「その時彼は幸福のあまり死ぬ⁵⁾」のである。

しかも「告知者として滅びる」という彼の死は、『ツアラトゥストラ』の没落は終わる」とこととされている。彼の死と没落の終りが等置されている。このことは遺稿においても同じである。「彼は自由意志によつて (freiwillig) 目を閉じ――そして死んだ。――このようにツアラトゥストラの没落することが起こった⁶⁾」。没落と死との関係をいかに理解すればいいのか。「自由意志によつて目を閉じ、そして死んだ」という言葉は、『ツアラトゥストラ』第一部「自由な死」へ導く。

『ツアラトゥストラ』において最初からツアラトゥストラの死が目指されていたことは、第一部「自由な死」から明らかである。そこでツアラトゥストラは「ちょうどいい時に死ぬ」と教える。「成し遂げた者は、勝利をおさめ、希望し誓約する者たちに囲まれ、彼の死を死ぬ。／このように死ぬことを人は学ぶべきだろう。そのように死ぬ者が生きる者たちの誓約を聖化しないような祝祭は、あつてはならないだろう」。この記述は大いなる正午という祝祭の場面を暗示している。大いなる正午におけるツアラトゥストラの死は、『ツアラトゥストラ』の基本的な構想に属する。「希望し誓約する者たち」とは「一つの希望の子供たち」であり、ツアラトゥストラの目標の相続者である。「まことに、ツアラトゥストラは一つの目標を持つていた。彼は彼のボールを投げた。今やお前たち友たちは私の目標の相続者である。私は黄金のボールを投げ渡す。／私の友たちよ、何にもまして私はお前たちがこの黄金のボールを投げるのを見たい」(「自由な死」)。ツアラトゥストラが持っている一つの目標とは超人、大地の意味としての超人である。ツアラトゥストラが市場の民衆に語った最初の言葉は

「私はお前たちに超人を教える」(「序説」3)であつた。「ボール、黄金のボールを投げる」とは、人間の自己克服によつて超人となること、重さの靈に抗して自分自身を高く投げることである。この黄金のボールを投げ渡すとは、友たち(一つの希望の子供たち)が彼の目標の相続者となるためである。黄金のボールを投げ渡すのは、「自由な死」の次の章「贈る徳」の最後で語られる大いなる正午においてである。そして友たちはツアラトウストラと同様に「黄金のボールを投げる」、つまり超人となるだろう。そしてツアラトウストラと同様に他の人々に「黄金のボールを投げ渡す」だろう。

ツアラトウストラの没落と死は第三部「新旧の板」3においても語られている。「私はもう一度人間たちのもとへ行きたい。つまり人間たちのあいだで私は没落したい。死にながら私は彼らに私の最も豊かな贈り物を与えたい。／太陽から私はこのことを学び取った、太陽が、極めて豊かなものが沈み行くときに。そのとき太陽は汲み尽くしえない豊かさから黄金を海に注ぐのだ。／……／太陽のようにツアラトウストラもまた没落したい」。ここでツアラトウストラは太陽の没落のように没落したいと思つてゐる。これは序説1における「このようにツアラトウストラの没落は始まつた」と同じように見える。確かに太陽の没落(太陽が沈むこと)に即して語られ、最も豊かな太陽が光をもたらずという点においては同じである。しかし序説における沈む太陽は朝の太陽として海の向こうの下界に光をもたらずが、ここでは沈み行く夕方の太陽としてこちらの海にその豊かな光を降り注ぐのである。何故このような違いがあるのか。それはここで太陽の没落がツアラトウストラの死と重ねられているからである。太陽は夕日として沈みながら(＝死にながら)、夕焼けの光としてこの世界に豊かな贈り物(黄金の光)を与えるのである。そのようにツアラトウストラは死にながら、永遠回帰の教えという光を与える。これによつてツアラトウストラの没落が終わるが、その没落は太陽の没落(死)による光、夕焼けの光としてである。この場面は遺稿において次のように記述されている。「すべての物語のなかで最も悲劇的な物語は天的な解決を持つてゐる。／ツアラトウストラは一步一步一層偉大になる——彼が一層偉大になるに伴つて彼の教えは一步一步展開する。／「回帰」は夕日のように最後の結末の上に輝く」。

「ツアラトゥストラ」は「ツアラトゥストラの没落が始まる」ことによって、その物語が始まり、「ツアラトゥストラの没落が終わる」ことを目指す。没落は太陽が沈む（没落する）ことに定位して語られ、豊かな太陽が光を与えることとして形象化されている。しかし没落の始まりは朝の太陽となる没落であり、没落の終りは夕方の太陽として沈みつつ、光を注ぐのである。朝の太陽によって始まり、大いなる正午において、夕方の太陽の如く光を注ぐことへ向かうという意味で、つまり朝—正午—夕方という展開において、「ツアラトゥストラ」は時間の物語である。

四 大いなる正午と大いなる日

「ツアラトゥストラ」は没落の始まりとその終りによって画定されている。しかしツアラトゥストラの没落がそれを目指し、それによって終わるのは、大いなる正午である。大いなる正午こそ「ツアラトゥストラ」の展開にその方向を与えている。しかし大いなる正午とは何か。「大いなる正午 (der große Mittag)」という言葉は黙示録における「大いなる日 (der große Tag)」を想起させる。大いなる正午が黙示録の大いなる日であることを証明しなければならぬ。

「しかしこれらすべての者たちに、今やその日が、変化が、斬首刀が、大いなる正午が来る。そのとき多くのことが露わとなるだろう。／そして自我を健全で神聖であると語り、我欲を至福であると語る者は、また彼が知っていることを一人の預言者 (ein Weissager) として語るのだ。【見よ、それは来る、それは近づいている、大いなる正午は】」。第三部「三つの悪」の最後においてツアラトゥストラはこのように語っている。「それは来る、それは近づいている、大いなる正午は」という言葉は、第三部「小さくする徳」の最後でも語られる。第三部は大いなる正午の切迫のもとで展開されているのである。

まず「それは来る、それは近づいている、大いなる正午は」という言葉に定位しよう。これは終末論的な表現として、イエスの宣教の最初の言葉を想起させる。「そのときから、イエスは『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言って、宣べ伝え

始められた」(マタイ4:17)。「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた」(マルコ1:14-15)。確かに「天の国は近づいた(das Himmelreich ist nahe herbeigekommen)」、「神の国は近づいた(das Reich Gottes ist herbeigekommen)」という言い方は、終末論的であり、その点で「それは来る、それは近づいている、大いなる正午は(er kommt, er ist nahe, der große Mittag)」と同じである。しかしここで近づいている大いなる正午は「斬首刀」としてであり、「天の国、神の国」とは正反対である。さらに「それは近づいている」という表現は、ルター訳の言葉と異なっている。「それは近づいている(er ist nahe)」という表現は黙示録の冒頭へ導く。「イエス・キリストの黙示。この黙示は、すぐにも起こるはずのことを、神がその僕たちに示すためにキリストにお与えになり、そして、キリストがその天使を送って僕ヨハネにお伝えになったものである。ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分の見たすべてのことを証しした。この預言の言葉を朗読する人と、これを聞いて、中に記されたことを守る人たちは幸いである。時が迫っているからである(die Zeit ist nahe)」(黙示録1:1-3)。

黙示録は「イエス・キリストの黙示(die Offenbarung Jesu Christi)」であり、「すぐにも起こるはずのこと(was in Kürze geschehen soll)」を伝える。黙示録は終末論的な認識のもとで書かれているが、それは「時が近づいている(die Zeit ist nahe)」という表現のうちに端的に表れている。しかしこの表現は「ツァラトゥストラ」の「それは近づいている(er ist nahe)」と同じ表現である。「そのとき多くのことが露わとなるだろう(da soll vieles offenbar werden)」という言い方は、黙示(Offenbarung)と「すぐにも起こるはずのこと(was in Kürze geschehen soll)」に対応するだろうし、「我欲を至福であると語る」の至福(selig)は、「……守る人たちは幸いである」の幸い(selig)であろう。

しかし最も重要なのは、「それは来る、それは近づいている、大いなる正午は」と語る者が「一人の預言者(ein Weissager)」とされていることである。「ツァラトゥストラ」において予言者という語は何度も登場するが、それはWahr-sagerとしてであって、Weissagerではない。「三つの悪」においてのみ、Weissagerと言われているのは何故なのか。それは黙示録の預言

を意識しているからである。「この書物の預言の言葉 (die Worte der Weissagung) を、秘密にしておいてはいけない。時が迫っている (die Zeit ist nahe) からである」(黙示録 22:10)。「預言の言葉」を語った預言者 (Weissager) としての黙示録のヨハネと同様に、ツアラトゥストラは預言者として「それは来る、それは近づいている、大いなる正午は」と語る。「大いなる正午が近づいている (er ist nahe)」という言葉は、黙示録の言葉「その時は近づいている (die Zeit ist nahe)」と対応している。黙示録において「その時」とは「大いなる日」であるから、大いなる正午は黙示録の大いなる日に対応するだろう。

「しかしこれらすべての者たちに、今やその日が、変化が、斬首刀が、大いなる正午が来る」(三つの悪)。大いなる正午は「その日、変化、斬首刀」と表現されている。大いなる正午が「その日」であるとすれば、「その日 (der Tag)」とはまさに「大いなる日 (der große Tag)」を意味するだろう。そして「変化」とは古き世から新しき世への変化であり、黙示録での最後の審判 (大いなる日) である。それが最後の審判であることは、「斬首刀」という言葉が暗示している。この残酷なイメージは黙示録の世界なしには理解できないだろう。斬首刀としての大いなる正午は、「怒りの大いなる日」である。「神と子羊の怒りの大いなる日が来たからである。だががそれに耐えられる (Bestehen) であろうか」(黙示録 6:17)。このように語られる黙示録の「怒りの大いなる日」は大いなる正午の記述と同じである。遺稿は次のように書いている。「最後の教説。人間を克服するハンマーがここにある。／人間はできそこないか。いいだろう、人間がこのハンマーに耐える (aushalten) かどうか我々は試そう。／これが大いなる正午である」⁽⁹⁾。大いなる正午において告知される永遠回帰の思想はハンマーであり、「その教説を耐える者たちを除いて、人間がそれにおいて没落する教説」⁽¹⁰⁾なのである。

「自我が健全で神聖であること、我欲が至福であることを否定する者」、つまり「すべての世界に倦み疲れた憶病者・十字架蜘蛛」(「三つの悪」) にとって大いなる正午は「怒りの大いなる日」＝斬首刀であり、彼らは大いなる正午において没落・破滅する。大いなる日は「大いなる日の裁き (das Gericht des grossen Tages)」であり、「斬首刀 (Richtschwert)」としての「大いなる正午」である。そして「すべての神々は死んだ。今や我々は、超人が生きることを欲する」ことを最後の意志と

する者たちの世が始まる。大いなる正午は古き世から新しき世への変化である。「ツアラトゥストラ」全体の展開を導く「大いなる正午」は、黙示録の「大いなる日」である。

確かに「ツアラトゥストラ」は聖書を意識して書かれており、黙示録もその一つであると考えられる。しかしここで問題とした大いなる正午は「ツアラトゥストラ」の単なるエピソードではなく、その全体の展開に基本的な方向を与えている。とすれば「ツアラトゥストラ」は黙示録として構想されているだろう。

「この人を見よ」(「なぜ私はかくも怜悯なのか」4)において、ニーチェは自らを「ツアラトゥストラの幻視者(der Visionär des Zarathustra)」と呼んでいる。それは幻視者ヨハネが黙示録を書いたことに対応するだろう。「ツアラトゥストラの幻視者」は、ツアラトゥストラの黙示録として「ツアラトゥストラ」を書いたのである。⁽¹²⁾「この人を見よ」はツアラトゥストラを生み出した詩人のインスピレーションを「啓示」と呼んでいる。「突然、言語を絶した確実さと精緻さをもって、最も深く人を揺り動かし衝撃を与える或るものが見られ、聞かれうようになるといふ意味での啓示」(「この人を見よ」)「ツアラトゥストラはこう語った」3)。ツアラトゥストラの幻視者ニーチェが体験したこの啓示(Offenbarung)こそ、黙示録(Offenbarung)としての「ツアラトゥストラ」を可能にした。聖書の黙示録が「イエス・キリストの黙示録(die Offenbarung Jesu Christi)」(黙示録1:1)であるように、「ツアラトゥストラ」はツアラトゥストラの黙示録である。

「ツアラトゥストラ」第一部の完成の後、ニーチェは手紙(一八八三年二月一三日)で書いている。「それは一つの『詩作』、あるいは第五の『福音書』、あるいは未だ名を持たない何ものかです」。⁽¹³⁾「ツアラトゥストラ」は、「知」の形態における「道化」としてのツアラトゥストラが「喜ばしき知」(福音)を宣べ伝える福音書である。この福音書は道化師ツアラトゥストラが新しき世の誕生を告げる黙示録であらう。

大いなる正午はツアラトゥストラの歩みのテロスである。とすれば黙示録は「ツアラトゥストラ」の終りを規定しているだろう。しかしそれはいわゆる「黙示録的なもの(das Apokalyptische)」というイメージ、世界の没落(Weltuntergang)とす

た曖昧なイメージを『ツアラトウストラ』のなかに見出すといったことではない。『ヨハネの黙示録』というテキストが『ツアラトウストラ』の終りを規定しているのである。

黙示録が『ツアラトウストラ』の終りを規定し、その全体を方向づけ、導いているとすれば、それは『ツアラトウストラ』を一つの全体として読む場合に突き当たる問題、つまり「三部構成―四部構成」問題に光を投げかけるだろう。

五 三部構成と四部構成

一八八四年一月に『ツアラトウストラ』第三部を書き上げたニーチェは、手紙においてそれを「ツアラトウストラの最終部」⁽¹⁴⁾「第三部最終部」⁽¹⁵⁾と呼んでいる。このとき『ツアラトウストラ』は三部構成として完成した。しかし一八八五年二月にニーチェはさらに第四部を書き上げ、同年四月半ばに私家版という形で印刷し、友人に贈った。これは「第四部最終部」とされている。翌年の一八八六年八月に出版された『善悪の彼岸』の裏扉に、「フリードリッヒ・ニーチェの著作」として『ツアラトウストラ』も挙げられている。それは「三部。一八八三―一八八四年」とされ、括弧として註記が付されている。「一八八五年の始めに書かれた、この作品の第四部最終部は、今日まで未だ出版社に手渡されていない」⁽¹⁶⁾。しかしニーチェは一八八七年に三部作として『ツアラトウストラ』を出版した。そして一八八八年に第四部を『ツアラトウストラの誘惑』として出版する計画を持っていた。そのために友人に贈られた第四部の私家版を回収しようとした。⁽¹⁷⁾『ツアラトウストラ』が四部構成として出版されたのは、一八九二年であり、それはニーチェ自身の意志ではなかった。

遺稿を見れば明らかなように、「ツアラトウストラ」は様々に構想されている。しかし出版した形においては、私家版ではあるが第四部を最終部として出版し、また『ツアラトウストラ』を三部構成として出版している。ニーチェ自身が、『ツアラトウストラ』を四部構成と三部構成という二つの可能性において考えたのである。『ツアラトウストラ』を読む場合、「三

部構成―四部構成」問題は極めて重要である。にもかかわらず、この問題は提起されたことさえない。

従来の解釈において、一般的に第四部は無視あるいは軽視されてきた。例えばハイデガーは『ツアラトゥストラ』第三部の「幻影と謎」と「回復する者」を頂点として捉え、第四部を無視している。フィンクも第三部を『ツアラトゥストラ』の頂点、核心と見なしている。『ツアラトゥストラ』は第三部においてその頂点に達する。それによってニーチェの中心的思想の段階的発展は終わる。ここでこの作品が終わるのが自然であつたろう⁽¹⁸⁾。フィンクにとつて第四部は「痛ましく惨めな逸脱」であり、「転落」である⁽¹⁹⁾。

『ツアラトゥストラ』解釈において、第四部が無視・軽視されてきたことは当然であると思うかもしれない。第四部を完成した後、ニーチェ自身が『ツアラトゥストラ』を三部構成として出版しているのだから。そうであるとすれば、第四部を無視・軽視するのではなく、『ツアラトゥストラ』を三部構成として読むべきなのである。しかし私家版としてであれ、第四部はその表題に「第四部最終部 (Vierter und letzter Teil)」と書かれている。ニーチェ自身が第四部を最終部と考えたこと、四部構成としての『ツアラトゥストラ』も否定できない。しかもニーチェは第四部を軽視していた訳ではない。『悲劇の誕生』の新たな序「自己批判の試み」(一八八六年)は第四部「高等な人間」からの引用で終わっている。「……笑いを私は神聖であると宣言する。お前たち高等な人間たちよ、学べー笑うことを」。さらに「この人を見よ」(一八八八年)「何故私はこのように賢明なのか」(4)において「ツアラトゥストラの誘惑」として第四部に言及している。第四部での同情の克服がツアラトゥストラの最後の誘惑、彼の力の本当の証明とされている。笑いと同情の克服も『ツアラトゥストラ』を貫く最も重要なテーマである。第四部を軽視・無視することは許されないだろう。

しかしニーチェ自身が三部構成の『ツアラトゥストラ』を出版していることも否定できない。それ故問題は、何故ニーチェが三部構成と四部構成というこの二つの可能性を考えることができたのか、である。この問題は単なる成立史の問題にすぎないのではない。『ツアラトゥストラ』という作品を全体としてどう解釈するかは、最も重要な論点を形成する。『ツアラ

トウストラ」を断片的に拾い読みするのではなく、一つの全体として読むとすれば、「三部構成—四部構成」というこの問題を避けて通ることはできない。

しかし全体として読むとはいかなることなのか。全体はその終りに達することによって全体となる。とすれば「ツアラトウストラ」がどのような終りを持つかという視点からこの問題に接近できるだろう。いかなる著者にとつても、その作品をいかに終わらせるかは最も重要な関心事である。「一つの新しい詩句を作ることより、終止符を打つこと (ein Ende machen) はより勇気が必要とする。このことをすべての医者と詩人は知っている」(「新旧の板」17)。詩人ニーチェはこのことをよく知っていただろう。

それ故第三部で終わるか、第四部で終わるかは、どうでもいい問題ではない。しかしニーチェはこの二つの可能性を考えた。とすればその二つの終りは何か共通の性格を持っているだろう。ニーチェがそれによって「ツアラトウストラ」に終止符を打つことができる考えたものは何か。黙示録が「ツアラトウストラ」の終りを規定しているとすれば、黙示録に定位することによってのみ、この問題を論じることが可能となるだろう。

三部構成であるとしたら、「ツアラトウストラ」はいかなる作品なのかを問わねばならない。このように問うことは、第三部を「ツアラトウストラ」の頂点と見なし、第四部を無視・軽視することとは根本的に異なる。「ツアラトウストラ」が三部構成であるとすれば、その終りをなすのは第三部最終章「七つの封印(あるいは然りとアーメンの歌)」である。この表題と副題が黙示録に由来することは明白である。

「ツアラトウストラ」が四部構成である場合、第四部最終章「徴」がその終りである。「ツアラトウストラ」におけるツアラトウストラの最後の言葉は「これは私の朝だ、私の日が始まる。今や上つて来い、上つて来い、お前、大いなる正午よ」であった。ツアラトウストラの最後の言葉「大いなる正午」は「私の日」として、黙示録の「大いなる日」を意味する。

『ツアラトゥストラ』の終りは、三部構成でも四部構成でも、黙示録によって規定されている。ニーチェは『ツアラトゥストラ』を黙示録によって終わらせようとしたのである。『ツアラトゥストラ』を三部構成として読んだ場合、この物語をどのように読むことができるのか。そして『ツアラトゥストラ』が四部構成であるとすれば、いかなる物語としてして見えてくるのか。黙示録という視点から読むことによって、『ツアラトゥストラ』は道化師ツアラトゥストラの黙示録として立ち現われるだろう。

註

- (1) Vgl. G. Naumann, *Zarathustra-Commentar*, I, S.94.
- (2) VII, S.541 Herbst 1883 16-49.
- (3) V2, S.396, Frühjahr-Herbst 1881 11-148.
- (4) VII, S.548 Herbst 1883 16-65.
- (5) VII, S.635 Herbst 1883 21-3.
- (6) VI4, S.973.
- (7) ツアラトゥストラの没落の終りが夕日として光を注ぐこと、夕焼けの光として理解できることから、「新旧の板」3の言葉が初めて解釈できるだろう。「人間は橋であつて、目的ではない。新しい朝焼けへの道として彼の正午と夕方故に、自分を至福なものとして讀める。／大いなる正午についてのツアラトゥストラの言葉。そしてその他、深紅の第二の夕焼けのように、私が人間たちの上に掲げたもの」。大いなる正午についてのツアラトゥストラの言葉は、第一部「贈る徳」3を想起させる(二)。大いなる正午に続く夕方は新しい朝焼け(新しい朝)への道である。この道を辿るのはツアラトゥストラの目標の相続者たちである。彼らは自分たちの大いなる正午を迎える。ここまではすでに論じた。問題は「深紅の第二の夕焼け」が何を意味しているのかである。この言葉は「第一の夕焼け」を想定している。それはツアラトゥストラの没落における夕焼けである。彼は最初の者として大い

なる正午において、夕方の太陽が海に光を注ぐように、つまり最初の夕焼けとして、永遠回帰と超人の教えという豊かな光を注ぐ。ツアラトゥストラの相続者たちはその大いなる正午を彼と共に祝い、夕方へ、そして朝への道を歩む。その翌日の朝は、相続者たちが彼らの大いなる正午において永遠回帰と超人の教えを告知するだろう。相続者たちはツアラトゥストラの第一の夕焼けのように、永遠回帰の教えを伝える。「深紅の第二の夕焼け」（複数）は相続者たちの夕焼けを意味する。最初の夕焼け、深紅の第一の夕焼けは、ツアラトゥストラの夕焼けである。

(8) VII, S.152f. November 1882-Februar 1883 4-127.

(9) VII, S.73 Frühjahr 1884 25-249. ハンマーが永遠回帰の思想の形象であることは明らかである。「最も力ある人間の手のうちのハンマーとしての永遠回帰の教説」(VII, S.295 Sommer-Herst 1884 27-80)。ハンマーが永遠回帰の思想の形象であるから、ハンマーと大いなる正午の結びつきも当然である。「永遠回帰」という表題の構想に「第五部 ハンマーと大いなる正午」(VII, S.295 Sommer-Herst 1884 27-82)とある。

【ツアラトゥストラ】においてもハンマーは「第一部「有名な賢者」において「精神のハンマーの残酷さ」として言及され、また第二部「至福の島」においても語られる。「今や私のハンマーがこの像の牢獄に向かつて残酷に荒れ狂う。石から破片が飛び散る。そんなことは私にはどうでもいいのだ」(「至福の島」)。この表現は「私は同情を克服した。大理石の叫びにおける芸術家の歓呼の声」という言葉と同じことを意味しているだろう。つまりハンマーは黙示録の「怒りの大いなる日」を暗示している。しかし「この人を見よ」において、「至福の島」の言葉に対してニーチェは次のように書いている。「ハンマーの堅さ、破壊に対する快そのものが、決定的な仕方でディオニュソスの課題にとつての前提条件に属する」(「この人を見よ」)【ツアラトゥストラ】8)。ハンマーという形象のうちに、黙示録とディオニュソスを読み取ることができる。この問題はイエス・ディオニュソスとしての黙示録へと導くだろう。

(10) VII, S.538 Herbst 1883 16-41.

(11) 「一方、自分の領分を守らないで、その住まいを見捨ててしまった天使たちを、大いなる日の裁き(das Gericht des großen Tages)のために、永遠の鎖で縛り、暗闇の中に閉じ込められました」(ユダの手紙) 6)。「新約聖書では主の日はユダヤ教黙示思想での

展開のあとを受けて、時間的に厳密に規定された意味を持っている。それはこの世（アイオン）の終り、新しい時代の初めを表す。それは「最後の日」であって、世界の審判がそれに伴う。……それよりもっと遅い時期の著者たちは、審判の「大いなる」日をユダヤ教黙示思想の線で表現する（II ペテ 3:12、ユダ六節、黙 6:17、16:14）（『聖書大事典』五九三頁）。黙示録の世界の実現をリアルに考えているが故に、多くの者の没落を欲するために、ツアラトゥストラは同情を克服しなければならない。黙示録的世界から初めて、ツアラトゥストラが同情の克服を重視していることの意味・重さが理解できるだろう。

- (12) 「私は三五歳の終りにいる。……この歳にダンテは彼の幻視を見、彼の詩の最初の言葉においてそれについて語っている」(Nietzsche Briefwechsel II-5, S.41)。一八七九年九月一日のケーゼリッツ宛の手紙においてニーチェはこうのように書いている。この手紙の二年後、ニーチェはツアラトゥストラの幻視を見た。ニーチェはその幻視について彼の詩において語っている。その詩の表題「シルス・マリア」は、永遠回帰の思想が襲来した場所を指している。「ここに私は座っていた、待ちながら、待ちながら、——しかし何も待たずに、／善悪の彼岸で、或るときは光を／或るときは影を楽しみながら、すべてはただ戯れ、／すべては湖、すべては正午、すべては目標なき時間。／このとき、突然、恋人よ／一つが二つになった——そしてツアラトゥストラが私の傍らを通り過ぎた……」（『喜ばしき知』補遺「プリンツ・フォーゲルフライの歌」）。このようにしてニーチェは「ツアラトゥストラの幻視者」となった。

- (13) Nietzsche Briefwechsel III-1, S.327.
(14) Nietzsche Briefwechsel III-1, S.481.
(15) Nietzsche Briefwechsel III-1, S.482.
(16) VI2, S.257.
(17) VI4, S.955f, VI4, S.957 Anm.26.
(18) E. Fink, *Nietzsches Philosophie*, S.114 (Kohlhammer, 6.Auflage)
(19) *ibid.*, S.114.